紫の伝説

終章 その二

古川益三

人跡未踏の秘境に咲く
一輪の花　人に一度として
愛でられることなく　枯れて行く
この花にどんな意味があると
いうのか

意味のないもの
そんなものはありはしない
だいたい意味のないものなんて
想像することさえできやしない
なぜなら存在が意味なのだから
存在の意味とは
存在それ自体がその意味なのだから
それがすべて

ただ その存在が観えないから
意味もわからない
花を見ていても花を観てなんかいない
花の一部しか見ていない
花の一部しか見ることができない

あなたはまだ
花ではないのだから
花を観ることは
できない
自らの想念を通して
見てしまう
そうすると生まれて
まだ何十年しか経っていない
未熟な自我想念が
何億年も生き続けて来た
花を見て
しまうのだ

だから花なんか
観えるわけがない
あなたはあなたしか観ていない

いや
あなたは
あなた
自身
以外何も
見たことが
ないのだ
生まれて
この方
あなたは
花なんか
一度も
観ていない
のだ

答えはあるのだ
名も知らぬ花が 山奥の岩場に
一つポツンとある時
それにどんな意味があるのかと 聞くことはない

その花がその意味なのだから
純粋に観るというのはむつかしい
だがそれは必要なこと
盲目では生きて行けないのだから
どんな言葉もどんな数字もいらない
ただ観ればいいこと
それが答えなのだ
完璧な合理性それが実存

ちゃんと観ていないから不合理であり矛盾であり悪があり
不幸があり病があるように見えてしまうのだ　それはとても
暗い世界　一刻も早く観ること　目をあければ自然に
明るくなるのだから　目を開かずにどうして花を観る
ことができるだろう

それは
あなた
自身が
花に
なること